

1回まちがうと全部まちがうということもあるといい、池田はどれかまちがうと皆まちがうということが多いようだ。被験者を北向きにすれば方向錯誤量は男女とも低い。別の方向になると地図をぐるつとまわしたり、体をひっくりかえしたりする学習態勢が見られる。今後は動物をつかつて人間との比較という面からもこの問題を進めていこうと思つていて今後の方向を明示した。

性差を生じると思われるその機制的探索に今後の研究が残されると同時に、討議もこの機制的探索を中心に終始したといえるだろう。

#### 教材研究における情報の利用

教師が指導案作成、教材編成をおこなうにあたって必要な知識・作業が教師にとつてどの程度可能であるかという研究目的に対し、波多野(東大)がまず何か教師の

指導のプランがあるのか、また、反応を予想する場合や評価についてどういうふうに教師に教えるか、この研究はどのようなことでなされたかと疑問を提出した。永野はこれに対し従来授業の研究はなされているが相互主体がどのようになされているか教師の反応の主體的なところをおつてみたいと思ふ。

また授業と研究者とのステップの点、等どのねらいを選択するか。結果として子どもが出来たかどうかということも1つのねらいになると答えた。発言中、時間切れで中断となつた。概して研究内容の意図的動機的主旨を明らかにする方向に論議が展開されていたと思われる。

以上討議を通し研究内容の主旨が明確にされ、学習指導法や教材研究に有効な示唆をもたらすものがあつたといえるだろう。(後藤ヨシ子)

## 27. 教科・指導 (7)

### 634 学業不振児に関する研究 (III)

○辰野千寿(東京教育大学)  
田中博正(信州大学)  
清水利信(横浜国立大学)  
阪本敬彦(野間教育研究所)

学習法・性格などのテスト項目の中から、国語・算数の学業不振児と正常児とで有意差のある項目100をとり出して作った学習要因調査票の妥当性を検討した。その結果、知能偏差値45~65の範囲の児童では、学習要因調査票の得点と国語・算数の成就値とのあいだに有意な関係があり、ある程度、妥当性を検証することができた。

### 635 職業価値感に関する研究 (1)

—対人信頼感との関連—

○武衛孝雄(島根大学)  
広井甫(近畿大学)

対人信頼感と志望職及職業価値感との関連を高3男女計570名に関し追求の結果対人信頼度得点の高得点職業群から低得点職業群、高得点価値群から低得点価値群への配列が可能であつた。志望職とその価値感との関連で把握しそれを対人信頼感に関係づけることによつて個人の対人信頼感を一層明確に具体的に理解することができた。

### 636 高校特奨生の学校生活適応について (3)

—性格特性との関連—

関 詢一(日本育英会)

高校特奨生の学校生活適応を、YG性格特性との関連において分析した。特奨生は一般高校生に比して思考的内向性の強い外は概して望ましい傾向が見られた。経済上の悩みは性格特性と相関がないのに対し、対人、修学上の悩みは、抑うつ性はじめ劣等感、非協調性、非客観性、神経質、回帰性傾向との間に相関がみられた。

### 637 女子短大生の実態に関する調査 (2)

篠原しのぶ(梅光女学院短期大学)

女子短大生の実態に関する調査の結果、女子短大生の社会経済的条件はかなり恵まれた環境にあり、一般的教養を深めるという目的で入学した者が多く、家政科より英文科の方が卒業後の進路について関心が強く、専門を生かす職業につきたいと希望している。又、学生の職業観は両親のそれにかかなり影響されている事等がわかつた。

## 討 論 の 概 要

### 部会の特徴

この部会における4つの発表のうち、最初の3つの発表は性格的なものとの関連においての問題を捉え究明しようとするものであり、もう1つの発表は女子短大生の実態を調べたものであつた。辰野ら(634)の研究は、